JAIST Repository
https://dspace.jaist.ac.jp/

Title	知床国立公園における野生動物観光に対するICTの影響と課題
Author(s)	敷田，麻実；能勢，峰；小川，洋平
Citation	第24回「野生生物と社会」学会大会プログラム・講演要旨集：61-61
Issue Date	2018-11
Type	Presentation
Text version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/10119/16906
Rights	Copyright (C) 2018 「野生生物と社会」学会．敷田麻実，能勢峰，小川洋平，第24回「野生生物と社会」学会大会プログラム・講演要旨集，2018，p.61．
Description	

JAIST
JAPAN
ADVANCED INSTITUTE OF
SCIENCE AND TECHNOLOGY

Japan Advanced Institute of Science and Technology

TS–12

知床国立公園における野生動物観光に対するICTの影響と課題

The Effects of ICT and the Problem with Wildlife Tourism in National Parks: Participatory Discussion

敷田　麻実・能勢　峰・小川　洋平

Asami SHIKIDA, Takane NOSE, Yohei OGAWA

1. テーマセッション趣旨

野生動物は一般の観光客、特に日常生活で野生動物と接する機会のない観光客にとって大きな観光魅力である。特に自然環境が保護されている国立公園などの保護区は、野生動物の生息密度が高いので、動物との遭遇を期待する観光客が多数訪れる。

こうした動物による観光客の誘引は、野生動物の人馴れ、接触、さらには給餌などの直接的利用につながり、野生動物の行動変化を惹起すると言われている。しかし、直接的な遭遇は従来、偶然の野生動物の出現に依存していた。そのため確率も低く、動物カメラマンなどの専門家がその現場を記録する以外、社会的に共有されることは少なかった。

ところが、近年のICT技術の発展で、野生動物との遭遇情報が簡単に、また広く共有されるようになった。そのうえ、野生動物の行動が、スマートフォンなどで手軽に動画記録できるようになり、記録頻度が増加した。さらに観光客の恣意的な感覚で切り取られる「野生動物の背景的利用」や野生動物を好みの姿にする「画像加工」が日常的になった。さらに「拡張現実AR(augmented reality)」などの技術進歩によって、実際の野生動物に視覚情報を付加することが可能になっている。こうした利用では、狩猟や捕獲のように、野生動物を直接的に食用や毛皮として利用することはないが、自らの好む野生動物像を意図的に産み生み出すことができる。そして、創られた野生動物像が訪れる観光客に共有されたり、危険な野生動物がかわいいと表現されたりするなど、別の意味を持たせることが可能になる。また、それがSNS上で広範囲に「拡散」する。

そのためこのセッションでは、観光客と野生動物の接触を媒介し、共有・伝達するICT技術による国立公園の野生動物保護と管理現場への影響を、北海道の知床国立公園の事例から紹介し、会場の関係者と意見交換することで、野生動物の非消費的利用とICTの影響や今後の課題についての理解を深めることを目的に開催する。

2. 講演者と講演タイトル

・主旨説明と野生動物観光の現状

　　敷田麻実（北陸先端科学技術大学院大学知識マネジメント領域）

・知床国立公園におけるヒグマの現状と対策活動

　　小川洋平（知床財団）

・知床国立公園のヒグマ観光とSNSによる記録・拡散の現状

　　能勢　峰（知床財団）

コメンテーター

　　近藤麻実（北海道立総合研究機構　環境科学研究センター）